

すっかんぽ

1991年12月号

タヌキの事情

11月17日、夕方6時ごろ、一匹のタヌキの死体が職員室に持ち込まれた。田沼町三好でタヌキが車にひかれるのを目撃した佐高生がお父さんの運転ですぐにとどけてくれたのだ。さわてみるとまだ暖かく、外傷はほとんどなかった。

「ハクセイにしましょう。」 「でも毛皮にした方が簡単じゃないですか」
「いや、タヌキ汁がいいよ。肉もとるならオレがや、てやるよ」と某氏、
さまざまな意見が乱れ飛んでいた。しかし、最終的には、

明日、生物の授業でみせた後、ハクセイ屋さんを持ちていくことにした。次の日、さすがに死後硬直していたが何やら、毛がもぐもぐ動いているような気配がする。よく見ると、体についていた1~2mmのダニが、はい出してくて、毛の上をはい回っているのだ。その数は百匹以上にはなりそうである。きのうはむしろ、タヌキ寝入りもしているのでは、と思うほど生きがよかったが、冷たくなった主を見放すダニをみて、初めて、タヌキの死を現実のものと感じた。

ところで、このタヌキ事件の、一週間くらい前にも、体育の大豆生田先生がタヌキを拾っている。やはり交通事故だったらしいが、偶然にしろ、一週間に二匹というのは多い。まして私自身、

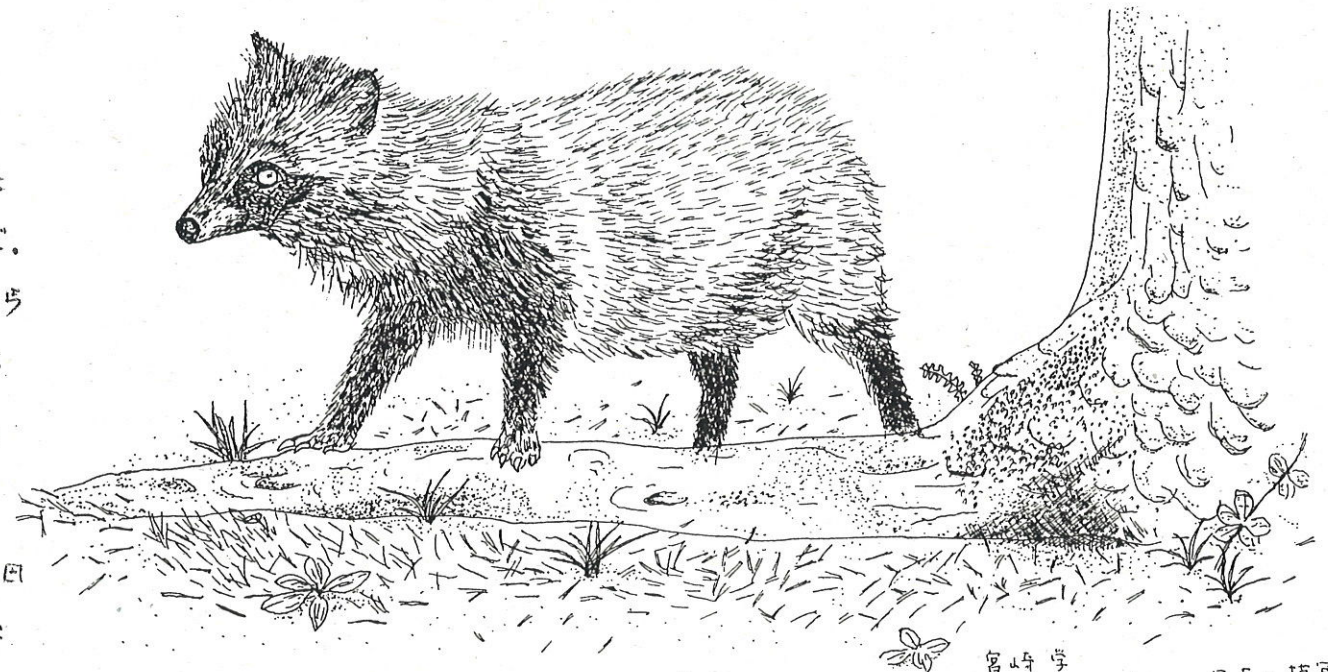
目の前でタヌキを見るのは、初めてだったので、ピンときてしまった。
「こいつは、におうぜ。何かある！」

そこで、まずは、最近タヌキを見た、という生徒や先生、そしてハクセイ屋のオバチャンなどに、タヌキレポートを提出してもらうことにした。さらに、新聞記事やテレビ、友人からの情報などが、14.5件寄せられた。それによると、タヌキは、ここ数年、目立ってふえてきており、今年は、昨年より、さらに目立っていることが明らかになってきた。たとえば、タヌキも持ってきてくれた。父子は、昨年、あわせて10件、目撃したのに対し、今年は、すでに17件も見ているというのだ。

また、ハクセイ屋のオバチャンも、ついこの間、猟師からのタヌキの持ち込みを断わ、たばかりだという。

なぜ、今年は、こんなにタヌキが目立っているのだろうか。

ここで、タヌキレポートの一部を紹介してみよう。

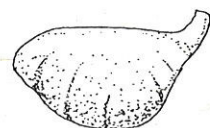


宮崎 亨
「けもの道の四季」中の写真と模写
1991. 12. 16.

ほぼ実物大のタヌキのペニス
↓ まさに筋金入り!



こう丸 →



ところで12月号では、「タヌキがふえている」と思わせる情報を特集したが、「本当にふえているのか」あるいは「タヌキが人里におりてきているので、目にする機会が多くなりふえたようにみえるだけ」なのだろうか。今月号はその点にせまてみたい。

本間さんによれば、昔(といっても10年程前)は足利だけで鉄砲で猟をする人が800人もいたが、今では300人くらいに減ってしまったという。それらの猟師は12/1~2/15の解禁期間に多い年で1人あたり30~40匹のタヌキを獲っていたらしく、タヌキはえり巻きなどにされていたようだ。ところが最近ではミンクやキタキツネなどのえり巻きが安く手に入るようになり、かえってタヌキは高くつくようになってしまったため、もうタヌキを獲らなくなってしまうというのだ。タヌキにとっては、今まで毎年何頭かずつ殺されていたのが、それがなくなれば、その分だけ確実にふえることになる。その結果限られたエサを求めて人里までおりてくることが多くなると説明することも可能だろう。

そこで本間さんに「死んだタヌキの胃の中にどんなものが入っているか、みてもらうことにした。」すると、

胃はおろか腸の中にも全く何も入っていない。

つまり、そのタヌキは、少なくとも一日くらいは何も食べてない空腹状態で、あたことが明らかになった。おそらく、エサをさがしてうろうろしているところを

車にひかれたのだろう。どうやら、タヌキは絶対数自体がかなりふえてきているようである。このことは、

栃木県立博物館にも問い合わせしてみたが、やはり、タヌキは、ここ数年ふえてきている、という答えが返ってきた。

最近では、タヌキだけでなく、北海道ではキタキツネもふえてきて、人にエサをもらう「都市型」の生活パターンが定着しつつあるらしい。しかし、そういった野生の動物たちがやがて、人からエサをもらうようになる事態は、はたして、彼らにとっては、幸せなのだろうか。

